2024/03/16　第 44 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を読む

「詩人の家」（１）

半田侑子(加藤周一現代思想研究センター研究員)

【梗概】

本章は、加藤の詩人ルネ・アルコス家における生活を描く。アルコスは加藤が戦時中に精神的支柱とした作家のひとり、ロマン・ロランに強く共鳴し、ジョルジュ・デュアメルやシャルル・ヴィルドラックらアベイ派の友人とともに「ウーロップ」を創刊した人物である。彼は亡くなった息子の未亡人ミシェールと暮らし、彼女の助けを借りながら小さな出版社を営んでいる。ミシェールは若く敏捷で、好奇心旺盛で、アルコスを労わるが議論では機関銃のように話す魅力的な人物として描かれる。アルコスとミシェールの日常的な議論によって、加藤はフランス人が議論を愉しむ習慣――しかも激論数刻のあとにしこりを残さず、お互いの間の感情を害わずに議論を愉しむ習慣――を目の当たりにした。加藤はアルコス家で暮らすことによって、フランス文化を内側に近い場所から経験する。また、アルコスとの議論を通して、「ほんとうの詩人」を彼の中に見る。

加藤はミシェールといっしょに街に出かけ、お互いが日本とフランスをそれぞれ代表して説明し合うのではなく、二人で共有した経験を、ことばに翻訳する「共同の努力」を傾けた。加藤はミシェール、朝吹登水子と共にしばしば芝居見物に出かけ、チェーホフを聞き、フランス現代劇を見、古典劇に触れた。加藤は戦前に経験した築地小劇場や戦時中に通った能楽堂が、パリの舞台に重なるのを感じる。そのうちに加藤は現代劇を見尽くし、関心は古典劇へと移っていく。もはや加藤にとって現代劇は、古典劇に背景や心理を付け足したものに過ぎなくなっていた。加藤にとって「ギリシャ」が実質的な意味を持ち始めた時代であった。加藤はアルコスの家に寄宿しながら、「ヨーロッパ」を発見していたのである。

【第一段落】

第一次大戦の前後にロマン・ロランの影響のもとにあった青年たちのなかに、旧僧院の建物を借りて芸術家だけの共同生活を営もうとした仲間があり、世に彼らを称んで「僧院派」ということがある。「僧院派」の中心人物は、小説家ジョルジュ・デュアメル、劇作家シャルル・ヴィルドラック、詩人ルネ・アルコスであったらしい。デュアメルは後にアカデミー会員となり、ヴィルドラックの芝居も後に国立劇場の演目に加えられるようになった。アルコス氏は何冊かの小さな詩集を残し、みずから小出版社を経営して、第二次大戦後には、一三区のアミラール・ムーシェ通りにひっそりと住んでいた。結婚して一子をもうけ、息子の将来に期待をかけていたらしいが、その息子が結婚して間もなく、美貌の夫人が――というのは机上に飾られていた写真から察してのことだが――癌で亡くなり、つづいて息子が脳腫瘍で死んで、後には老いたアルコス氏と若くして寡婦となった息子の嫁ミシェールの二人だけが残された。私がパリへ行ったのは、その頃である。

（1） ルネ・アルコス（René Arcos、1880 年 9 月 16 日-1959 年 7 月 16 日）は、フランス、クリシー出身の詩人・作家。1906 年にフランスの詩人、作家のジョルジュ・デュアメル(Georges Duhamel,1884-1966)、シャルル・ヴィルドラック(CharlesVildrac,1882-1971)、ジュール・ロマン(Jules Romains,1885-1972)と共に自給自足の生活を送り、アベイ派(Groupe de l'Abbaye,1906)を創立したとして名高い。1903 年の処女詩集《本質的な魂》以来一貫してヒューマニズムの立場をつらぬいた。第一次世界大戦時には反戦的姿勢を崩さず、戦後は左翼に属す。1922 年頃に作家のロマン・ロランと共に雑誌『ウーロップ』(Europe)を創刊し、1940 年の休刊まで主幹となった。またロマン・ロランに私淑し、その作品と思想の普及を主目的として自ら出版社(éditions Saplier)を起こした[1]。

（ルネ・アルコスとロマン・ロラン、『ロマン・ロラン研究』第 7 号、1952 年 12 月）

（2） 僧院（アベイ）派…1885 年頃から隆盛を極めた象徴主義の文学運動に対して、19 世紀末には早くも反動が起こったが、その一つが僧院派である。この時代には象徴

---

[1]高橋純「RenéArcos の日本人読者へのメッセージ――RomainRolland 理解への一助として――」『言語センター広報 LanguageStudies』（第 27 号、小樽商科大学言語センター、2019、57 頁）および『平凡社世界大百科事典』渡邊一民執筆「ルネ・アルコス」の項を参照。

派の個人主義への反動も強くあった。マルヌ河畔のクレテイユにおいて詩人と画家たちが共同生活を営み、自分たちの借家が旧「僧院」であったことにちなんで「アベイ派」L'Abbaye と名乗った。集まった詩人はジュール・ロマン、デュアメル、ヴィルドラック、アルコス。

（３） 敗戦後(1948 年)の加藤周一にとってのロマン・ロラン：《ただ彼らの発言と行動との中に現れた善意と人間性（人類）に対する信頼とは、私の魂によびかけるし、私はそれだけのためにも、現代フランスの或る作家たちを読みたいと思う。否、少くとも或る時期に、（その時期は必ずしも終わったのではない）私が人間精神に対する敬意を失わなかったとすれば、それらの作家たち、殊にロマン・ロランの存在を通じてであった》[2]

（４） 『羊の歌』（正・俗）に書かれるアベイ派の人々[3]
・ジョルジュ・デュアメル、シャルル・ヴィルドラック、ルネ・アルコス（『羊の歌』「戯画」）⇨第三段落（２）と関連
・ジュール・ロマン（『続羊の歌』「南仏」）

（５） 雑誌『Europe ウーロップ』と戦時中の加藤周一
加藤周一『『羊の歌』余聞』（鷲巣力編）収録「フランスから遠く、しかし……」からの引用：《私は三〇年代のフランス文学の作品ばかりでなく、雑誌を拾い読みすることで、それらの作品の生みだされた知的共同体の一般的な傾向を推察しようとしていた。私が読んだのは、主に《N.R.F》と《ウーロープ》である。大学のフランス文学研究室にかなりの数の「バック・ナンバー」があり、東京神田の古本屋にもときどき何冊かを見かけることがあった。
〔中略〕
他方、ロマン・ロランを中心として出発した《ウーロープ》誌の方は、日本ではあまりよく知られていなかった。その編集者は創刊以来両大戦間に二度変った（レオン・バザルジェットおよびルネ・アルコス、1923-1929 年。ジャン・ゲーノ、1929-1936 年。ジャン・カスー、1936 年以後）。20 年代には、ジュール・ロマンやデュアメルやヴィルドラックの「僧院」派の活躍がめだっていたが、30 年代には、ゲーノ、カスー、ジャン＝リシャール・ブロックを中心として、ピエール・ジャン・ジューヴ、ポール・エリュアール、ポール・ニザン、エマニュエル・ベルル、ジョ

---

[2] 加藤周一『現代フランス文学論Ｉ』銀杏書房、1948、20-21 頁。
[3] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか――『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018、357 頁。

ルジュ・フリードマン等が加わり、左翼的立場を鮮明にした。一九三六年（十月号）の一冊をみると、ジャン＝リシャール·ブロックとジャン·カスーがスペインについて書いている。

「直接の目標は、ファッシスムへの道を遮ぎることである。その他のすべての目的は、権力の革命的奪取を含めて、この目標に従属させられなければならぬ」（ブロック「エスパーニュ・エスパーニュ・Ⅲ」）

「人民戦線のスペインにおける敗北は、フランスにおける敗北の先触れである」（同上）

「この際スペイン以外のことについて語るのは、不可能だ」（カスー「スペインの一人の詩人について」）

これはフランス共産党の立場（ブロック）からみての人民戦線の考え方を要約し、フランスの左翼知識人（カスー）のスペイン内乱に対する態度を代表していたといってよいだろう。

一九三六年にヨーロッパで起ったことは、スペイン内乱だけではなかった。ヒトラーはライン非武装地帯に軍隊を入れ、ムッソリーニはエティオピアを併合していた。また中国では西安事件、日本では二・二六事件が起り、翌年、日本軍は上海から南京まで中国侵略戦争を拡大するはずであった。私は三六年の《ウーロープ》を三六年に読んだのではなく、数年経って、おそらく太平洋戦争の前夜に、拾い読みしたのである。しかし、今からふりかえってみれば、ジャン＝リシャール・ブロックとフランス共産党は、一九三六年当時の状況を正確に見抜いていた。その後スペインの人民戦線が敗れ、ついでフランスの人民戦線が崩れ、ミュンヘン会談（一九三八年）の後、ヒトラーが独ソ不可侵条約を結んで、ポーランドに侵入した（一九三九年）のは、よく知られているとおりである。[4]

・ジャン·ゲーノなどは加藤が敗戦後に取り上げ論じた作家。詳しくは岩津航『レトリックの戦場』「第３章　抵抗の文学」参照。

（６）海老坂武『加藤周一――二十世紀を問う』からの引用：《ロマン・ロラン、ゲーノら反ファシズム作家たちへの共感、レジスタンスの文学にたいする評価は、戦争中の日本文化・日本の知識人への怒り、彼らの言葉への憎しみとつながっている。日本の詩人も小説家も知識人も戦争反対の声をあげなかった、しかし、せめて沈黙することはできたはずだ……》[5]

【第二段落】

---

[4] 加藤周一『『羊の歌』余聞』鷲巣力編、筑摩書房、2011、85-86 頁。

[5] 海老坂武『加藤周一――二十世紀を問う』岩波書店、2013、54 頁。

市内では珍しい木造二階建てのその家は、通りから少し入ったところにあった。階下には広い書斎と食堂につづく居間があり、狭い階段を昇ると、階上に寝室が三つあった。書斎の壁には、革で表装された古今のフランスの作家の著作集がならび、いくらか外国の近代文学の仏訳も混じっていた。居間の壁には、ヴラマンクやモジリアーニやマリー・ロランサンの若い頃の油絵、ジャン・コクトオやフラン・マズレールの粗描と版画がかかっていて、陶器や銅の道具類が、古い家具と共に、その間の空間をみたしていた。それは、長い年月の間に、一家族の歴史がその隅々までをみたし尽した部屋である。能率のよい事務所の感じから、それほど遠い部屋も少かったろうが、アルコス氏は書斎の大きな机のまえの肘掛椅子にその身体を沈めるようにして、その出版業の書類を読んでいた。若くて敏捷なミシェールは、小さな机とタイプライターを居間におき、その仕事を手伝い、手紙を書いたり、電話をとりついだりしていた。その仕事はロマン・ロランの本の版権の交渉も含んでいて、翻訳を出している世界中の出版社との連絡が必要であったらしい。「日本の出版社から版権料の届いたことはないね」とアルコス氏はこぼしていた。外国からの手紙は、大抵フランス語か英語かで書かれていた。稀にはドイツ語の手紙を私が訳したこともある。ミシェールはアルコス氏を《プチ・ペール》と称んで親しんでいた。彼女が台所で食事の支度をしながら、何かの旋律をくちずさむと、アルコス氏は、「あ、この家のなかでつぐみがうたっている」などといった。

（1） 市内では珍しい木造二階建て
⇨パリ市内は石造りの建築が多い

（2） 「長い年月の間に、一家族の歴史がその隅々までを満たし尽くした部屋」
ヴラマンク（1876-1958）フォーヴィズム
モディリアーニ（1884-1920）エコール・ド・パリ　モンマルトル「洗濯船」
マリー・ローランサン（1883-1956）エコール・ド・パリ　モンマルトル「洗濯船」
ジャン・コクトー（1889-1963）「洗濯船」のピカソなどと交流
フラン・マズレール（1889-1972,Frans Masereel／フランス・マシリール）　木版画、ロマン・ロラン、トマス・マンなどの挿絵でも知られる。

(Frans Masereel による『ジャン・クリストフ』挿画、木版、1925)

・エコール・ド・パリの芸術家たちは 1920 年代、モンパルナスやモンマルトルに集っていた。アルコスの家に飾られた作品は、1920 年代のエコール・ド・パリの時代に活躍した芸術家たち、彼らに影響を与えたヴラマンク、ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』の挿絵を書いたマシリールなどアルコスの同時代人である。フラン・マズレールに加藤は会ったことがある。

（3） 《プチ・ペール petit père》、「おじさん」と訳されることが多い。親しい間柄での呼称。一方でアルコスはミシェールをつぐみに喩えるなど、二人の温かい関係が伝わる。

【第三段落】

六〇代の半ばを過ぎた詩人は、論客ではなかったが、二人は絶えず議論をしていた。「どうも白人の女が黒人と連れだって歩いているのは見よくない……」「なぜ黒人じゃいけないの？」「いけないとはいわぬが……」「それならいいじゃありませんか」「街で見かけると、よい体裁ではない」「とんでもない、プチ・ペール、綺麗な黒人が沢山いますよ」「あ」「人種的偏見はロマン・ロランの弟子に適しくない」「このあばずれめ」――そういいながらも、アルコス氏は議論を愉しんでいたにちがいない。激論数刻のあとにしこりを残さなかったのは、けだしその話題が、個人の利害に渉らなかったからであろう。それにしても機関銃のような早口で喋りまくったミシェールが、別の話題に移ると、和気あいあいとして、「プチ・ペール」をいたわりながら談笑していたのは――私からみて、一種の壮観というほかはなか

った。お互いの間の感情を害わずに議論を愉しむ風習は、東京での私の経験のなかにはなかった。またその後パリ以外の外国の都会でも、少くとも同じ程度には、見聞しなかったと思う。「とんでもない、あなたのいったことは、全くほんとうでない」というフランス語を、ほかの言葉に直訳すると、日本語と日本人の場合にかぎらず、多くの人々は色を作（な）した。もしそれを適当な英語に意訳すれば、「そうですな、私はあなたと全く同意見ではないかもしれない」であろうし、日本語に意訳すれば――「仰言ることはもっともだ、お説の通りではあるけれども、しかし……」ということになるのであろう。

（1）　ルネ・アルコスとミシェールの論争

・アルコスの人種差別的発言とミシェールの反駁によって、ロマン・ロランの系統を継ぐ詩人の一つの限界を示すとともに、次の世代によって説得される様子を描く。

・議論の愉しみ、激論数刻のあとにしこりを残さない

⇨「お互いの間の感情を害わずに議論を愉しむ風習」を加藤はパリの稀有な特徴の一つとして描写する。感情を害わずに議論ができるのは相手をお互いに尊敬し信頼しているからであろう。

（2）　論争の描写を通した生身の人間としてのルネ・アルコス

⇨ロマン・ロランとその周辺の人々に対する神格化からの脱出

前掲加藤「フランスから遠く、しかし……」引用：《その頃、私はまた、高等学校で片山敏彦先生からドイツ語を習った。片山先生も青年の頃ヨーロッパに留学して、ロマン・ロランと出会い、ドイツ文学よりもロランとその周辺のフランスの詩人たちをおそらく青春の想い出と重ねて、また軍国日本との対比において――美化し、理想化し、ほとんど崇拝しておられた、と思う。ヴイルドゥラックやデュアメルや「僧院」派の詩人たち、またシュペルヴィエルやマックス・ジャコブの名まえを片山先生の口から聞いていると、私は彼らが西方浄土に住んでいるかのような気がした。西方浄土の中心には阿弥陀のように全能のロマン・ロランが坐っていて、ガンディーやヴィヴェーカーナンダと対談し、ベートーフェンからドゥビュッシーまで、シャルトルからボナールまでの西洋の芸術について語っていた……。しかし西方浄土は東京を隔てること十万億土の彼方にある。人は浄土を讃仰することはできるが、浄土と音信を交すことはできない。私が「僧院」派の詩人の一人、ルネ・アルコスの家に住みこんだのは、戦後しばらく経ってから、一九五〇年代の初めの頃だが、アルコスと私は、あるとき、ニースの旧港（ヴィユ・ポール）でロマン・ロランに親しかったベルギー系の画家、フラン・マズレールに会った。「カタヤマ？ われわれみんなが彼を好きだった」とマズレールはいった、「しかし、日本へ帰ってから一度も手紙をくれないのは何故だろう？」――その「何故」を説明するためには、

一人のカタヤマではなく、一つの文化を説明しなければならなかったろう、私がそのなかで生きてきた一つの文化を。（下線は引用者による）》[6]。
⇨『羊の歌』「戯画」第四段落を参照。またこのことは次章『続羊の歌』「南仏」にも取り上げられる。

（3）　「とんでもない、あなたのいったことは、全くほんとうでない」（仏）
「そうですな、私はあなたと全く同意見ではないかもしれない」（英）
「仰言ることはもっともだ、お説の通りではあるけれども、しかし……」（日）

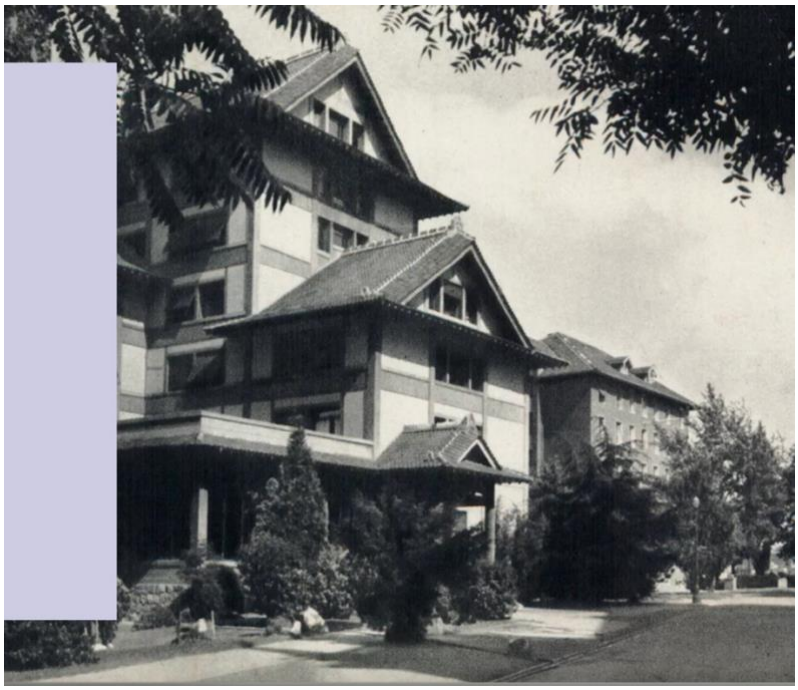
【第四段落】

「学生町」の日本館を去った私が移り住んだのは、アルコス家の二階の寝室の一つであった。そこには寝台一つ、机と椅子、小さな書棚があり、中庭に面した窓を開くと周囲の建物の屋根に切りとられた小さな灰色の空が見え、見下せばリラの植込みがあって、五月が来ると、その花の香は窓際まで匂って来た。私はその部屋で自炊をしていた――といっても、煮たきをしていたのではなく、出来合いの食品を買って来て、ぶどう酒と珈琲をもって一食をすませていた。一日に一度は、大抵どこかの安食堂へ出かけたが、五〇年代のはじめに、安食堂は二〇〇乃至三〇〇フランで、充分の量の食事を提供し、しかもその味は洗練されていた。「長く外国に暮していると、みそ汁が懐しくなりませんか」という旅行者に、私が暗黙の同意をもって応えたのは、ほんとうにみそ汁の味が懐しかったからではなく、相手の意を汲んで、日本人としての資格を疑われたくなかったからである。私はル・ノートゥルの庭を見て、小堀遠州の泉水を想い出したが、パリの安食堂で無名の赤ぶどう酒を飲みながら、築地のすし屋の酒を想い出したことはなかったし、カフェ・オ・レとタルティーヌ（バタつきパンの一種）の朝食を喫しながら、みそ汁を想い出したこともなかった。食べものに関するかぎり、私ははじめから当時のフランス人のいちばん安い食事に満足していたのである。しかし靴下の穴を繕うのには苦労をした。私は街を歩くことを好んだので、靴下はすぐに破れた。しかるに私の繕い方によれば、一つ穴を繕う度に、靴下はいくらか短くなる。また別の穴があくと、それをふさぐのに、もっと短くなる。あまり短くなりすぎたときに、私は新しい靴下を買うことにしていた。それだけの金は辛うじてあった。

[6] 加藤周一『『羊の歌』余聞』鷲巣力編、筑摩書房、2011、85 頁。

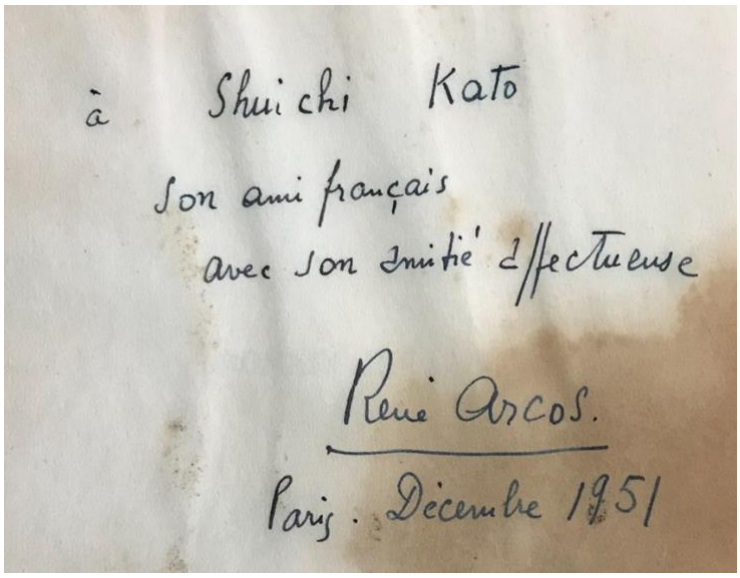
（1）加藤の引越し

「学生街」Cité internationale universitaire de Paris の日本館[7]



(https://www.ciup.fr/maisons/maison-du-japon/)

『続羊の歌』によれば、加藤は朝吹登水子の紹介によってルネ・アルコス家に下宿する。だが、知り合ったのは渡仏して間もない頃のようだ。というのも、加藤がアルコスに贈られた『ロマン・ロラン』の献辞によると、日付は 1951 年の 12 月と書かれている。


à Shuichi Kato
Son ami français
avec son amitié affectueuse
René Arcos.
Paris. Décembre 1951

[7] 日本語ホームページ https://maisondujapon.org/

（２）東西の庭

・ル・ノートゥル（André Le Nôtre）の庭

⇨ヴォー＝ル＝ヴィコント城庭園(1640 年代、50 年代にかけて建設)やヴェルサイユ宮殿庭園、またテュイルリー宮殿庭園の泉水（1664 年）が有名。左右対称。

（ヴォー＝ル＝ヴィコント）

（テュイルリー）

・小堀遠州の庭

⇨仙洞御所(南池東岸の切石積み直線の護岸と出島(もとは中島)の部分)，二条城二の丸庭園(寛永度の改修)，準公儀というべき南禅寺塔頭金地院(鶴亀の祝儀の庭)，隠居所兼菩提所とした大徳寺塔頭孤篷庵(茶室忘筌の露地)は彼の確実な作品である。遠州の意匠は，それまでの庭園には見られない大胆な直線を導入したことが特筆される[8]。

---

[8] 『平凡社世界大百科事典』村岡正執筆「小堀遠州」の部分を参照。

参考：「戯画」第九段落《しかし桂離宮の意味を一九三〇年代に発見したのは、バウハウスとブルーノ・タウトを生んだ西洋の文化であって、東京の文化ではなかった。私はその東京の文化のなかで暮らしていたのである。》

（仙洞御所）

（参考：桂離宮）

【第五段落】

私はしばしば階下でアルコス氏と駄弁を弄しながら、夕食の時を過ごした。ミシェールはその時間にはどこかに出かけていることが多かったが、老人が家を空けることはほとんどなかった。朝鮮で停戦交渉が長びき、「冷い戦争」のたけなわであった頃、「米国人は頭が悪い」というのが、アルコス氏の口癖であった。「彼らは頭が悪いのではない、まちがった前提から出発しているだけだ」と私はいったことがある。私たちは議論をした。「どういう前提か」「共産主義者は悪魔だという前提である」「そういう前提そのものが頭の悪い証拠だろう」「まちがった前提が、頭の悪さにもとづくとはかぎらない」「それならば、何にもとづくのか」「米国人の大部分が、共産主義者の顔を見たことさえないという事実にもとづくと思う」「ダレスもか」「彼は前提を検討しない。あたえられた前提をみとめ、それをみとめるかぎりでは合理的な政策をたてているのだ。政策の合理性は、頭の悪さではなく、良さを証拠だてていると思う」「スペインにはアルコスという町がある、私はスペインを知っているが、どうもスペインの牡牛と米国人には似たところがある、赤い布を見せると、忽ち興奮して理性を失う……」。その頃、仏印では植民地戦争がつづいていたが、アルコス氏にとって、それは「汚い戦争」であり、外相ジョルジュ・ビドーは、軽蔑すべき《ビドーシュ》であった。七〇歳に近い詩人は、「古きよき時代」の想い出を語らず、その代りに現代の世界を語っていた。しかし話が時事にかぎらなかったことはいうまでもない。「あなたは神を信じている？」とたまたま来合わせたある婦人に向っていったこともある、「神は何処にいるでしょうか。天上に――ということは、東京の人々から見れば、下の方にいるということですな」「私には罪なき懐胎よりも、懐胎なき罪の方が有難い」。また特別の革で装幀した詩集を私に手渡していった、「触ってごらん、どうだこの手触りは、女の腿のようにやわらかい……」。――ロマン・ロランは、あきらかに、この人の上にその影響の跡を残していたと思う。しかしロランが、その音楽や焼絵硝子や神秘主義にも拘らず、人道主義者であり、国際協調主義者であり、進歩主義者であったとすれば、詩人アルコスは、もっと直接に、いわば強い矛盾をそのなかに含まぬままで、人道主義者であり、国際協調主義者であり、進歩主義者であったのだろう。その世界ははるかにせまかった。しかしそこには、偽りでないもの、贋でないもの、たしかに正真正銘のものがあった。老いてもなお、遠いアジアで殺されている民族主義者に、ほんとうに心を動かされるということは――おそらくほんとうの詩人にしかないことであろう。詩人は、新聞記者になり得るし、政治学者にもなり得る（アルコス氏はむろんそのどちらでもなかった）。しかし新聞記者の知識または政治学者の方法が、彼らの裡なる詩人をつくりだすのではない。

（1） 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』による解説[9]

・朝鮮戦争は一九五〇年六月二五日に始まり、一九五一年七月一〇日に開城で休戦

[9] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018、361 頁。

会談が開かれる（会談場はのちに板門店に移る）。会談が始まっても、しばらくは戦闘が止まなかった。休戦会談は難航して何度も中断し、二年にわたる交渉の結果、休戦協定が調印されるのは一九五三年七月二七日。

・その頃の「外相ジョルジュ・ビドー」Georges-Augustin Bidault（一八九九―一九八三）は、フランスの政治家。戦後に成立したドゥ・ゴール政権で外相を務める。自主独立外交路線を主張するも、アメリカとの協調関係の維持にも努める。西ドイツとの和解に力を注ぎ、欧州鉄鋼石炭共同体（ここからヨーロッパ共同体への道を歩む）加盟に力を尽くす。しかし、第五共和政下に、ドゥ・ゴール大統領がアルジェリアの独立を認める方向に向かうと、アルジェリアとインドシナ独立に徹底して反対し、極右団体とも連携した。「機会主義的」行動を採ったことで批判される。一九六二年に反逆罪で逮捕状が出ると、ブラジルに亡命した。「軽蔑すべき《ビドーシュ》」とはフランス語の〈bidoche〉で、その意味は「悪い肉」であるが、「悪い奴」、「食えない人間」という意味ももつ。ビドーの機会主義的政治行動に対する批判的表現であるが、〈Bidault〉と〈bidoche〉とが韻を踏んでいる。

・ダレス」John Foster Dulles（一八八八―一九五九）は、アメリカの政治家・外交家。トルーマン大統領（民主党）は、一九五〇年にダレスを国務省顧問に任命。一九五二年に就任したアイゼンハウワー大統領（共和党）は、ダレスを国務長官に任命しダレスは一九五〇年代のアメリカ外交を主導することになる。その外交政策は一貫して反共産主義を堅持した。

（２）「汚い戦争」：《私が巴里に住んでいた頃、鈴木〔信太郎〕先生は巴里へ来られた。巴里に当時居合わせた弟子が集り、羅典区の旗亭に一夕の宴を張った。森有正、中村光夫、三宅徳嘉、他にも何人か東京帝国大学仏文科に学んだことのある若い人たちが集ったように思う。そのときの鈴木先生は、料理やぶどう酒の話に興じ、子供のように愉しそうにみえた。私たちはしばらく「汚い戦争」（と当時のフランス人は、インドシナ戦争を呼んでいた）のフランスを忘れた》[10]

（３）「神は何処にいるでしょうか。天上に――ということは、東京の人々から見れば、下の方にいるということですな」「私には罪なき懐胎よりも、懐胎なき罪の方が有難い」
⇨罪なき懐胎…処女懐胎
アルコスの宗教観

---

[10] 加藤周一「去年之雪今何処」「自選集」第 5 巻、21 頁。

（4） 「ほんとうの詩人」:「しかしそこには、偽りでないもの、贋でないもの、たしかに正真正銘のものがあった。老いてもなお、遠いアジアで殺されている民族主義者に、ほんとうに心を動かされるということは――おそらくほんとうの詩人にしかないことであろう」
⇨加藤にとって「ほんとうの詩人」に欠くべからざる資質が何であるか、上記の文章に表現されている。

（5） 「詩人は、新聞記者になり得るし、政治学者にもなり得る（アルコス氏はむろんそのどちらでもなかった)。しかし新聞記者の知識または政治学者の方法が、彼らの裡なる詩人をつくりだすのではない。」
⇨遠く離れた、まったく関係のない人々が殺されることに、心を動かされることが「ほんとうの詩人」であるが、この資質は新聞記者の知識あるいは政治学者の方法によって、作り出せるものではない。どれほど知識があろうと、方法に卓越していようと、詩人の魂がなければ、現状の追認以上の仕事はできない。

【第六段落】

アルコス氏と冗談を言い合うのは、私の日常の習慣の一つになったが、それは言葉の上で必ずしも容易なことではなかった。アルコス氏は夕食のまえに、モンパルナスのカフェ・クーポールへ出かけて、ペルノーを飲み、夕食のときにまたぶどう酒を飲み、そのあとでコニャックかカルヴァドスを飲んでいたので、夕刻には発音が明瞭というわけにはゆかなかった。しかし私はこの年老いてもはや詩を書かなくなった詩人に次第に強い親愛の情を感じるようになっていた。私は彼の冗談を好み、たとえその議論がまちがっていたとしても――あるいは単純にすぎたとしても、その動機にはほとんど常に共感を覚えていた。

（1）たとえその議論がまちがっていたとしても――あるいは単純にすぎたとしても、その動機にはほとんど常に共感を覚えていた。
→第五段落の議論を参照「米国人は頭が悪い」(まちがった、あるいは単純にすぎる議論)、「老いてもなお、遠いアジアで殺されている民族主義者に、ほんとうに心を動かされるということ（動機）は――おそらくほんとうの詩人にしかないことであろう。」
⇨「その動機にはほとんど常に共感を覚えていた」

Ex.「古きよき日の思い出」第十四段落
《しかじかの理くつにもとづいて、はるかに遠い国の子供たちを気にしなければならぬということではない。彼らが気になるという事実がまずあって、私がその事実から出発する、または少くとも、出発することがある、ということにすぎない。二五万人の子供……役にたっても、たたなくても、そのこととは係りなく、そのときの私には、はるかな子供たちの死

が気にかかっていた。全く何の役にもたたないのに、私はそのことで怒り、そのことで興奮する。……》

以上